若手・中堅職員の 現場を楽しむ「マイペース」活用術

第6回

マイペースに場をまとめる②

本田（ほんだ）　茂（しげる）
農業経営診断士　６次産業化プランナー

１．はじめに

前回の連載では、場をまとめるためは、リーダーを育てることが必要で、JA が事務局役に徹しながら、ビジョンと目標を持てるようにサポートすることを解説してきました。

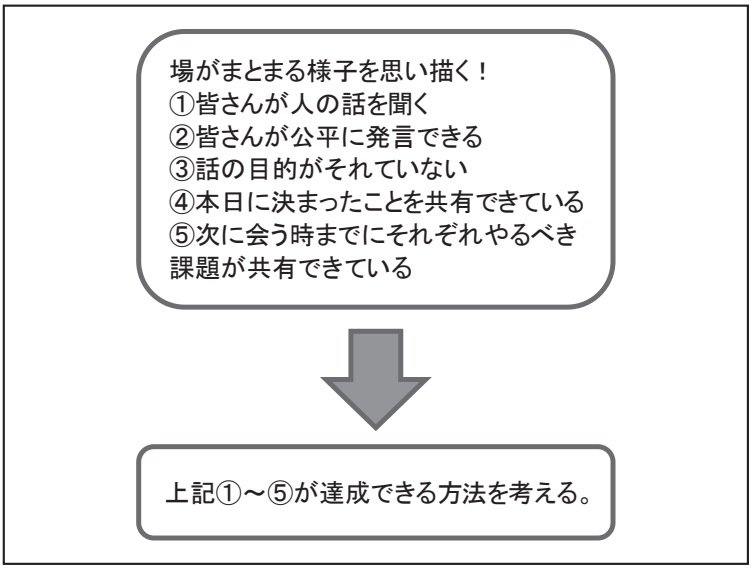
筆者のいる東北地方では、集落営農の法人化が大きな課題になっています。しかし、集落営農のむずかしさは、皆さんもご存じのとおり、①構成員がたくさんいること、②専業、兼業と地域にさまざまな立場、年齢の方がいるのでまとまりにくいことです。

そこで、JA の皆さんが事務局になり、集落営農などの構成員がまとまることをサポートできれば、組合員から大きな信頼を勝ち取ることができると思います。部会や集落営農など、これからますます皆さんの場をまとめる力が必要になってくるはずです。今回は、前回に引き続き２つ目以降のテクニックを解説していきたいと思います。

２．場をまとめるサポート　②ファシリテートする

２つ目のテクニックは、場をファシリテートすることです。そのためには、まず「場がまとまる」イメージを考えてみてください。それはどのような状態でしょうか？　図１のように、①～⑤の状態を思い描いて下さい。そのためにどのような方法にしたらよいの

図１　場がまとまる様子を思い描くことから始める



か考えていきましょう。

話し合いの場は、空中戦になりがちです。人の話を聞けなかったり、誰かがいい意見を言っても他の人が発言して打ち消されてしまいますよね。これらのやり取りを冷静に第３者の立場で俯瞰する役割の人が必要なのです。

では、具体的にどのようにすればいいのでしょうか？

次頁の図２を見て下さい。まずは話が空中戦にならないように、①のように発言をきちんと見えるようにすることです。

ホワイトボードや模造紙は、ない農家さんがほとんどですよね。これを持参してあげ、JA の会議室を使うことが大事です。こうした面倒くさいことを、JA が事務局として準備してあげるのです。

場をまとめるには、準備なくしてならずです。

次に、図２の②ですが、皆さん、だれもベンチにいてはつまらないですよね。まずは、なるべく公平に全員に話をさせてあげること、きちんと名前を呼んで、他のメンバーがその人の発言を聞く空気を作ってあげることを心がけて欲しいのです。参加した個が満足すると、場がまとまりやすくなるのではないでしょうか？

図２　場をファシリテートするテクニック

①発言をホワイトボードや模造紙に書いてあげる
②「〇〇さん、どう思いますが？」と 名前を呼んでふってあげる
③話が目的からそれたら、「次の議題で話し合いましょう」といったんそらす
④区切りのいいところで、決定したことをまとめる。でた意見を集めてまとめる。自分がまとめようとしない
⑤今日決まっていないことは、箇条書きにして項目ごとに責任者を決めて次回までの宿題にする。

↓

①自分の意見を聞いてもらえた経験が、個々の満足につながる
②個々の満足が次回までに前向きな行動につながるようになる
③次の話し合いで前よりまとまりやすくなる

次に、図２の③、④のように、場をその日の結論に向かうようにリードすることです。ここは、自分は話の輪の中に入らないで、話の内容が脱線しないことを気にかけ、どうしても話がまとまらない時は、一通り発言させた後で、リーダーに結論を言いきってもらうことも時には必要です。この場合も、個々に自分の意見を話さないで先にやってしまうと、不満が残ります。このあたりの話の振り方もファシリテーターの難しいところであり、試行錯誤し考えながら実践していってほしいです。

最後に、図２の⑤のように、打ち合わせの終了時には、何が決まって、何が決まらなかったのか？その日の課題を整理してあげることが必要です。そして、決まっていないことは次回までに誰が責任者となってやってくるか、その場

で決めておくことが必要です。

3．場をまとめるサポート ③議事録をとる

農家さんは、紙に残すことが苦手です。ホワイトボードに書いたことや、模造紙にまとめた内容を簡単なペーパーにしてあげることが大事です。会議終了後にレジメを渡してあっても、次回の会合ではもう一度用意しましょう。

こうしたコツコツした支援が、農家さんの場をまとめる縁の下の力持ちになり、後で感謝されるのではないでしょうか？

4．さいごに

①ビジョンを持たせる、②ファシリテートする、③議事録をとる、の３つを皆さんが支援することで、組合員さんが集まる場をまとめるお手伝いができそうでしょうか？組合員を主役にすることは、皆さん第３者が入り込みすぎないことがポイントであり、結果として組合員を成長させる手法です。特にこれからの若手組合員との関わり方では必要だと思います。

場を自分一人でまとめようとせずに、主役が組合員と思うことで気が楽になったでしょうか？

本来は、部会組織は組合員のもので、自分たち自身で運営していくべきものです。自分達がどのような方向にいきたいか？　そのための課題は何か？　全てJA職員に委ねるのは依存の状態だと思っています。組合員、部会員の方が、個々の経営課題を解決するために自ら集団を結束し、自立することが、本来の協同組合の姿ではないでしょうか？

執筆者紹介

本田　茂…農業経営診断士。宮城県在住。農家や農業法人に対する経営支援をおこなうため平成24年10月独立。17年間JA全農で青果物流通の現場にいた。主な担当品目は、菌茸類、豆類、土物全般、筍、梅、きゅうりなど。在職中に、平成22年経済産業省登録中小企業診断士となる。現在は、農家の商品開発や販路開拓、GLOBALGAP認証支援、青果物市場の経営コンサルティングや人材育成、（社）日本食農連携機構東北支部事務局長を務め、農業者と企業とのマッチングの場つくりの活動を行っている。

●園芸担当者向け研修講師承ります。
お問い合わせはJA経営実務担当粟野まで awano@zenkyou.com;

いまこそTACだ!!

第48回

「白神ねぎ」10億円販売に向けた生販マッチング支援

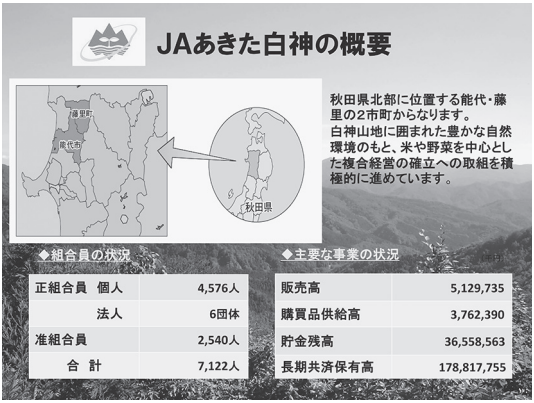
伊藤（いとう） 隆一（りゅういち）
秋田県・JAあきた白神　経済部
経済課　係長

JAあきた白神の概要

JAあきた白神は秋田県北部に位置しています。世界自然遺産に登録されている白神山地に囲まれた豊かな自然環境の中で、農産物を栽培・販売しています。近年は水稲依存の経営から、野菜を中心とした複合経営を確立する取組みを積極的に進めています。

なお、組合員の状況や事業の状況は図表１のようになっています。

図表１



TACの概要

TACの設置は平成24年４月１日です。管理者１名、各担当者が４名の体制でスタートしましたが、現在８名体制で活動しています**（図表２）**。

主な活動は、担い手への各種の情報の提供や提案、また、JAへ